

# 令和7年度浦添市立中央公民館講座 平和キャラバン特集 戦後80年の今 平和を考える 学校にお出かけして講座します！

地域学校協働活動



## ボランティアだより 第22号

浦添市教育委員会 社会教育推進課 社会教育協働係



今年は今を生きる私たちには想像もつかない、悲惨で残酷な沖縄戦が終結して80年目の年になります。浦添市中央公民館では今年度14のプログラムによる平和キャラバン講座を開催しました。今回は12校で行われた平和キャラバンの中から「ボランティアだより」担当者が見学した3校の様子についてお伝えします。

5月21日（水）港川小学校 浦添市教育長 銘苅健氏

「一人芝居「いくさゆーぬ ゆっかぬひー」

1年生から6年生までの全校児童が、銘苅教育長演じるおじーが孫に語る戦争の話に引き込まれるように見学していました。

「ゆっかぬひー」は旧暦5月4日、今でいう子どもの日で、子ども達の健やかな成長を祝う日でもありました。この日はおもちゃを買ってもらえるのが子どもたちの楽しみでした。

仲良く暮らす家族の暮らしにも戦争が近づき「ゆっかぬひー」におもちゃを買ってあげることができません。いよいよ戦争が始まりおじーは徴兵されました。残された妻と娘二人は戦死。戦後沖縄に帰ってきたおじーは、焼け落ちた家から末娘の小さい骨とおもちゃとして与えた石を見つけてきました。絶望の中からおじーは大切な命を次の世代へつないでいく決心をしたというお話でした。

見学した子どもたちから「戦争は人を殺し傷つけ苦しめる。絶対にやっつてはいけなと思った。」「オジーがっつなげた大切な命が今につながっていることがわかった。」などの感想がありました。



6月13日（金）浦添中学校 一 中戦没学徒資料室解説員 大田光氏による語り  
沖縄戦の男子学徒隊 神谷依信さん（当時15歳）の体験

平和な世界に  
なりますように！



日本軍に兵士として動員された男子学生の年齢は14歳から16歳、現在の中学校とほぼ同じ年齢の生徒が通信隊や鉄血勤皇隊として戦場にかかり出されました。県内12校から1500名以上が動員され、半数以上が戦死しました。

男子学徒隊の神谷さん達は仲間11名で行動していましたが戦況の悪化により突然解散を命ぜられました。6月19日頃、アメリカ軍の攻撃を受け一中生3名が戦死。当時「命は鳥の羽よりも軽い」と教えられていた神谷さん達は配られた手りゅう弾で自決を決めますが不発に終わり「生きられるだけ生きていこう」と壕を出しました。

11名いた仲間のうち生き残ったのは神谷さんを含めた4名でした。神谷さんは「自分の命も大切、他の人の命も大切。これを根本にしないと」「教育の大切さ」を伝えないといけないという思いから戦後50年たってようやく重い口を開きました。神谷さんは戦争の話をするときなぜかいつも笑いながら話をしました。解説員の大田さんは「なぜ、このような辛い悲惨な体験を語るのに笑っているのか、皆さんわかりますか。神谷さんの背景にあるもの、心の後ろ側までよく見て考えてほしい」と問いかけていました。



5月30日（金）宮城小学校 朗読会「道」の嘉数明美氏 大城勝政氏  
「シシブリーシ ナランドー」絵本の朗読

語り手の大城勝政さんがご自身のお母さんの戦争体験を絵本にした「シシブリーシ ナランドー」とは「もうほんとうに こりこりだよ」という意味のうちなーぐちです。

家族で戦火の中を逃げ惑う様子や、何日も食べる物がなく焦げたサトウキビをかじって飢えをしのいだことなどを嘉数さんと大城さんが感情をこめて読み語りました。

児童からの質問に真剣に向き合って答えていましたが「自分だったらどう思うか、調べ学習などして自分の答えを見つけてほしい。」と考える契機も与えていました。

児童の皆さんからは「戦争になるとご飯も食べられないし、水も飲めなくなっていやだと思った。こんな事は二度と起こってほしくない。」「絵本を読む時の震えるような声や悲しそうな声が本当に起こっているようで悲しくなつた」などの感想が寄せられました。



お問い合わせ

浦添市教育委員会 社会教育推進課 社会教育協働係 担当：大浜、川